

布伦タノーの精神現象の分類

島崎 得道

精神現象を區別することは學問研究上重要なこ

とである。之は一面學問の進歩と共に進歩する。

始めは極粗雑な區別が半ば空想的に立てられた。

ソクラテスが最初學問的に手をつけプラトロー之を受けて精神を三作用に分つた。欲求、激情、理性之である。各又身體の上中下部に各局所中心があると考へた。之は不完全が多い。

アリスラレースの考方の中に始めて對象の志向的内在といふ考が現れて居る。之が近世にまで長く續いた。カントも三分法をとり三者何れもが他から導く事が出来ぬと考へた。精神作用は外と内

この二方向の區別しかないと云つた學者もある。ロツツエはカントの三分法を取つた。

學問的分類は研究に役立つ様な仕方ではなければならぬ。従つて自然の性質上區別され分類されるものでなければならぬ。分類される對象に應じて仔細に又有効に之を區別せねばならぬ。而してその標準がはつきりきまつてゐぬと混同や不徹底に陥り却つて學問の研究を妨げる。

精神現象と物體現象との相異は對象の内在といふことにある。従つてその内在的關係といふことを標準とすれば自ら精神現象の中にも種々の分類區別が出来るのであるまいか。之が吾々には自然

で又便利の様に見える。従つて有効で學問的である。

さて然らば意識の對象關係により精神現象は幾つに分類されるであらうか。ブレンタノーは三つになると考へた。併しそれは普通の三分法と異つて知識、感情、意志ではない、表象、判斷、情意(愛憎)の三種である。

然らばこの三種は如何。各々に多少の説明を加へてその説く所を辿つて見よう。

吾々に現はれたまゝの對象それが表象である。色を見る、色が表象である。音を聞く、音が表象である。何か思ひ出す、それも表象である。判斷でも想像でも意志でも感情でも凡て精神現象で表象に關係せぬものはない。心に浮べられたものの儘が表象である。名を指されて分る、それも表象である。

判斷とは何かを受容れ又は排斥する、即ち眞と是認し偽と判定する處の肯定否定の作用である。

情意即ち心情の作用とは上の二類に入らぬ精神現象の凡てである。普通に愛憎等の所謂感情は勿論之に入るがその外、願望、決心、意企などの所謂意志と稱せられるものも之に屬する。快不快希望決意等は皆之中へ入る。悦びとか悲しみとか欲念とか嫌惡とか憎惡皆この中に含める。判斷が或對象を眞か偽か何れかに決めて受容れる様に心情は之を善いか悪いか、好きか嫌ひかの何れかに決めて受容れる、若くは斥ける。

以上の三分法はカント等の三分法とは著しく異なることが分る。何れが正しいかは俄かに斷ずることとは勿論出來まいが大體吾々の内省に訴へて、ブレンタノーの分類に無理がないことはうなづかれる。對象の内在的關係を檢するに、内經驗即ち内面的反省による意識の自己知覺より外に標準がな

いとすれば、彼の云ふ辯護も亦尤もである様に思ふ。唯問題はこの内的知覺の何たるかに残る。內的觀察の様に勝手な獨斷を外から持つて來て補ふ様な謬りを防ぐ爲には鋭い省察を尙要すること、思ふ。

今少し詳しく考へて行つて表象と判斷との相異を問題として見よう。表象と判斷とがちがふといふのは意識の對象に對する關係がちがふといふのである。尤も判斷の根柢に表象があるといふことは少しも差支へない。唯その上に判斷は表象とちがつた對象關係を有して來るといふにある。否判斷に於ては對象が二重の意味に於て意識關係に持來されてゐる。即ち對象は表象せられて其上に評價即ち眞とは是認され又は偽と否認せられてゐる。之に似た關係はよく云はれる表象と意欲との間にも存する。意欲するには表象しなければならぬは

勿論であるが、而も意欲は表象と異つたその上加へられた他の意識關係であつて、單に表象するのとは同一でない。判斷も同様で、眞偽何れかに評價せられるには勿論最初表象せられなければならぬが、評價はその表象の上に更に別の意識作用が加はらねば評價とは云はれぬ。判斷に於て表象せられたものは表象せられると共に評價せられるのである。即ち二重の意味に於て意識關係の對象となる。かゝることが吾々の精神現象を仔細に内省して見ると明かに云はれると思ふ。之は今更にと新らしくブレンタノーが論ずる迄もない誰もがよく認める處である。唯ブレンタノーがはつきりと所謂内面的知識としてその作用を區別したのである。尤もこの内面的知識即ち内的知識として區別する作用の區別に就ては尙多くの異論と誤解とが起り得るかも知れない。例へば二者を作用は同一であるが對象がちがふと云つて、ブレンタノー

などの作用の區別に反對する學者もある。或はそれを作用その物ではなく、その作用から出て來る結果の相異、又はその作用の完全不完全の相異であつて、絶對の相異でない、作用は一つであるとなすものもある。併し是等は皆不充分な又不徹底な區別の仕方である。是等の異説の不徹底をブレインタノーは可成精密に又鋭く批評してその缺陷を指摘してゐる。そして表象と判斷との區別はその物の中の内面的區別であつて即ち判斷が單なる表象と異なるは本質的の區別であることを明かにしてゐる。

こゝでブレインタノーは判斷を表象された内容の結合や分離であるとなす考へに激しく反對して、表象内容が一つであつても判斷は之を拒否し若くは認容して成立することが出來るといふことをはつきり主張してゐる。例へば「甲がある」とか「甲はない」とかいふ或對象の存在を主張する判斷は

かゝる判斷の一例である。

この事から又ブレインタノーは判斷の表はす凡ての命題は存在命題に直すことが出來ることを論じてゐる。そして存在といふ概念は決して賓辭とならない、即ちそれ自身丈では全く意味がないことをも云つてゐる。

この凡ての命題が存在命題になるといふ判斷の特有なる性質は、判斷と表象との區別を單なるその對象の項の結合關係に歸しようとする論者にその蒙を啓く絶大の力となるものである。所謂判斷の主辭賓辭などいふ項の區別は單に言葉の上の云ひ表はし方の區別に過ぎぬ。判斷の本質上の區別ではない。たつた一つの項だけでも吾々は之を拒否し又は認容することは出來る。かくしてそれを判斷に表はすことが出來る。即ち存在判斷の命題が之である。その對象は普通の表象と何等變りがないが唯之に加はる作用が異なるのである。即ち判

斷の判斷たる所はその作用の特異なる點にある、對象や内容の相異にあるのではない。

表象と判斷の區別が對象を把捉する作用の強度の相異や或は把捉せらるゝ對象の單複結合の如何に依らぬとすれば、之をなすものは對象に對する作用その物の關係の仕方相異と見る外はない。即ち根本的の作用の相異によるのである。判斷に於ては表象の上に更に別の作用が加はり意識は二重の意味に於て對象に關係する。

表象その物には眞も偽も善も惡もない。之に判斷が加はり情意が加はつて始めて眞偽善惡の區別が生ずるのである。之等は表象とはまた別の法則に従つて働く意識の作用である。

表象その物が知識でない。之に判斷が加はつて始めて知識となるのである。知識は眞偽の區別を有つて居なければならぬ。之は表象その物から

出て來るのでなく、判斷から出て來る。即ち判斷に依つて始めて表象の眞偽が生じ、かくして吾々の知識となるのである。

然らば普通に判斷と表象とをすぐ混同して多く區別しないのは何によるのであるか。一つは吾々の心理的事實に特有な理由から發する。も一つは言葉の不精密による混同もある。

心理的理由といふのはブレンタノーの所謂内的知覺の事實から發する混同の理由である。吾々の意識作用は如何に簡單な意識であつてもそれが具體的の意識である以上、單にその中に對象として或表象を含むのみならず、同時に之を表象してゐるといふことの意識、即ちその作用に就ての知識若くは判斷をも含むものである。即ち一般に意識してゐるのみならず意識してゐるといふことをも意識してゐるのである。換言すれば意識は對象の

意識と同時に作用の意識を含む。併しこの作用の意識は普通の對象の意識とは同列に論ずることは出来ぬ。何となれば之を對象化すればその對象化する作用の意識がまたなければならぬからである。作用の意識に基く判断否作用を知る吾々の知覺はブレンタノーの所謂内的知覺であつて、之に基く意識現象の知識は彼の所謂内的知識である。普通に知識と稱せらるゝ對象の知識とは同日に談ずることの出来ぬ謂は、特異な知識である、之とは次元を異にしたものと見なければならぬ。心理學はこの内的知識に基く精神現象の學であるが、この知識の判断を普通に對象の知識と稱せらるゝ判断と混同する時、吾々はやがて表象と判断との混同に陥る。

凡ての意識には作用の意識を伴ふ即ち内的知識を伴ふ。表象も意識である以上その對象を表象する意識と同時に、その表象してゐるといふことの

意識即ち作用の知覺を伴ふものであつて、之に基く内的知識の判断は表象と雖も意識である以上有つてゐるのである。併しかゝる作用認識の判断は直ちに對象認識の判断と同一でない。表象に於いては對象は單に意識に現前してゐるといふ丈で、その眞偽を判断してゐるのではない。何となれば之を判断する前に、先づ吾々は其を表象しなければならぬからである。而もこの眞偽を判断してゐるのではないとの知覺即ち作用の意識は、常に凡ゆる意識の作用に伴つて吾々の内的知識を形作る。而してかゝる知識は表象作用の存在に關する知識であつて、表象の對象が存在するや否やに關する知識でないから、この場合いはゆる表象とは全然別個の、即ち表象してゐるといふ事を意識する事によつて得られるものであるから、かゝることの判断を直ちに前の表象が判断であることに基くとすることは出来ない。普通に表象を直ちに判

斷と考へ、凡ての意識の最根本的なる物を表象にあらず判断であるとすは、かゝる内的知覺の判断と對象意識の判断とを區別せずして同一に見るからである。併し兩者は嚴に區別しなければならぬ。吾々は或對象を表象する、而して之を判断する。併し之を判断しない前も、之を表象したといふ表象その物の知識は伴ふことが出来る。この知識は作用の意識に基く判断であつて、むしろ表象が判断でないことを判断する作用その物の内的判断である。故に表象が判断であるといふことは正しくその意味を異にする。凡ての意識に、その意識の作用その物の内的知覺による判断、即ち内的判断を伴ふからと云つて、その判断が外的即ち對象への判断であると云はれない。

意識に伴ふ、意識の作用自身の知識、即ち内的知覺の判断は、その意識に第二義的のものであつて、謂はゞその意識があつて始めて、かゝる判断

が伴ひ得るもの、後者を直ちに前者と同一視することは出来ぬ。表象を判断となす論者はこの第一義的のものと第二義的のものを混同してゐるのではあるまいか。

一體判断には存存といふことを含んでゐるが表象には之を含んでゐない。古來の存在に關する本體論的證明も神の存在と神の表象との混同に基く誤謬ではあるまいか、神と神の表象とが同じである、即ち表象が直ちに存在判断を含むといふ論は、古くはトーマス・アクィナスなどにより、最も強く唱へられたのであるが、吾々にはどうも首肯し難い。

以上の様なことからブレンタノーは從來の論理學が普通に陥つてゐる表象と判断との混同から論理の邪道に墮することを難じて、新たに論理學の改造を企てんとした。例へば從來の推論式が三つ

の項より成立つと考へたに對して、推論は四つの項の間に成立つべきものと云つてゐる。之は英のブル Book も唱へ既に一般の注目を惹いてゐる所である。その他否定推論に於て、又は直接推理に就て、從來の論理學に多くの缺陷あることを指摘した。

今は併し論理學や形而上學に深入するいとまはない。唯今日までの心理學が、そのなすべき反省を幾分怠つてゐるではないかといふ事を指摘すれば足る。從來の心理學は、判斷生起の法則に就いて、全く無批判にその研究を怠つてゐた傾向がある。表象も判斷も一様に「思惟」なる一語に片付けて、表象結合の法則だけを研究して、直ちに判斷の本質を極めたりとなしてゐたのであるまいか。ロツツエの如き秀れた心理學者すら、判斷や構想力に關しては、その生起發達必ずしも一様でないが、之を説明するには表象離合の法則より外に必

要でないと云つてゐる。之など明かにロツツエがカントから得て來た意識現象の分類に對し、無反省にして缺陷あることに氣付かぬからである。この點に關しジョン・スチュアート・ミルの方が遙かに鋭い。彼は吾々が判斷に於て命題を構成するに際し、單に表象の結合關係の法則のみで律することの出來ない特殊な作用の形があることに氣が付いて、その研究を必要とする様に考へてゐた。

二

さて以上の如く、表象と判斷とが二つの異つた精神現象としてその區別が明かになつたとすれば吾々は更に進んで、第二の仕事、即ち普通の精神現象分類法に反對して立てる、意志と感情とを同一作用と見る立場の説明に移り行かねばならぬ。

この感情意志を同一に見ようとする見解は、必ずしも新らしいものではない。アリストテレース

以後テテンス・メンデルスゾーン・カントにもこの考へはあつた。近代の心理學者中にも同様の考へに支配されんとする傾向のものも多少はないでもない。例へばスペンサーの如きこれである。併しその方法に於て尙不十分な點が多い。

吾々はこゝで、さきの表象と判断とを區別した意識の志向的關係と同様の原理に依つて、意志と感情との關係がどうなるかを檢して見よう。それが爲には、直接の内的知覺に訴へて、所謂直下の自省と内省とによつて、之を明かにしなければならぬ。

然るにこゝに第一に氣付くことは、所謂意志と感情との間には、吾々の前に見た表象と判断との間に於ける様な、根本的の相異が見出だせないといふことである。即ちその對象に對する關係が全く同一である。に見えるといふことである。總じて精神現象を吾々が區別するのに、その對象に對

する關係に依つてしなければならぬことはブレントノーの繰返し述べてゐる所であるが、今感情と意志との間の對象關係の相異を見るに、其處に何等の本質的相異を發見しないといふのが、その内省に訴へてすぐ明かなことである。若し兩者の間に、丁度表象と判断との間の様な根本的對象關係の相異が認めらるゝならば、即ち感情と意志とが、その本質上、全く異つた對象關係と作用の性質とを有してゐるとすれば、勿論、吾々の之を同一種的作用と見んとする見解は、大なる過誤と謬見に陥るものと云はなければならぬ。併し事實は明かに吾々に有利である。即ちその間のはつきりした區別は、實際つけ難いと思ふ。吾々はさきに、表象と判断との對象關係に於て、その間にはつきりした區別をつけることが出來、又之を明瞭に區別することは極めて容易且つ必要であるといふ事に就いては、充分論じ明かにした筈である。

然るに、感情と意志との間に於ては、全く事情を異にする。兩者を根本的に異つた二つの精神作用であるとするには、その對象關係の區別を何によつてつけるかは、殆んど不可能なこの様に見える。之をなすことが吾々に全く出來難いといふのが布伦タノーの意見である。

意志と感情との間には色々の中間物を考へることが出来る。或は欲望、衝動、感動、快、不快、努力、緊張など種々の状態を考へることが出来る。併し是等は皆、同一種類の精神現象の種々なる段階若くは程度の相異又は移行きと見ることが出来る。絶對の明確な區別を精神現象としてつけることは困難なこと、思はれる。強いて區別しようとするれば、多少の無理を犯して、次の様にでも説明するより外に仕方がない。例へば悲しみとは、何か失はれたよい物に對する憧憬、それからそれが

得られるだらうとの希望、之を得んとの欲望、之を企てる勇氣、それから決意、遂に實行といふ風に、その間に多少の區別はあると同時に、絶えざる働きの上の推移若くは段階と見て、同一性質の對象關係に動かされてゐると見なければならぬ。一方の端は感情であり、一方の端は意志である。而も兩者は互につながつた一貫した作用の上の連絡があるのであつて、一方を他方から離し、若しくは他方を一方から區別して吾々は考へることが出來ぬ。若しかくの如き、意志と感情とを全く異つた二つの精神作用と見るとすれば、右に擧げた如き、悲しみとか希望とか、欲望とか勇氣、決心實行といふ様な現象は、その何れに、而も如何なる理由のもとに、之を入れるのであるか。之に全く標準も原理も存しないではないか。

或は論者の中に、かういふ者があるかも知れない。吾々は憧憬を感じ、希望を感じ、欲望を感じ

勇氣を感じるが、決心を感じ、行爲を感じることはないから、前の者は感情に屬するが、後者は意志に屬すると。併しながら、かゝる區別は果して支持さるべきものであらうか。成程、吾々は悲しみに於て、或對象の損失を感じ、憧れに於て、或對象の缺乏を感じる。併しながら、憧れといふ時既に、吾々はその對象への努力を含むのである。はあるまいか。即ち既に、一種の希望に向つて發展し、勇氣と決意との少くとも萌芽を藏してゐると云はれないだらうか。而して遂に決意と行爲との所謂意志にまで發展して、最初その中に感じ或は望まれてゐた實行に移つて、却つて自分自身を明かに自覺して來るのであるまいか。意志も感情も、その本質に於て、かゝる自覺の種々なる段階として、むしろ同一作用の連續的發展でなければならぬと思ふ。たゞ一つを感情といひ、他を意志と呼ぶは、かゝる發展の終始兩端を、便宜上二

つに分けて見たものに過ぎない、本來内部經驗として、單一に發展する精神現象を、試みに、中心と外延との兩方面より別に名づけた二つの異名たるに過ぎないと思へ得る。強度の差でもなければ勿論、對象のちがひでもない、全く同一作用の同一對象關係に於ける、見方の相異に過ぎないのである。この點は、表象と判斷との區別の如き、明確な作用的區別とは、同日に談することの出來ない不明瞭なものであると云はなければならぬ。

意志と感情とが以上の如く、同一精神現象であるとするが至當であるならば、ブレンタノーが、一般に精神現象分類の原理なりとする、所謂其對象關係から見ても、意志と感情とは、根本的に異つた對象關係ではないといふことが、明かにされなければならぬ。然らば吾々は、意志及感情の共通なる對象關係の特質として、何を擧ぐべきで

あらうか。こゝにもまた、ブレンタノーの見解にして正しいならば、内的知覺、即ち意識自身の内的知識が、之を教ふるものでなければならぬ。之に訴へて始めて、兩者の同一種類の意識統一なることも、明かにされ、納得されるのである。

判断の一般的性質が或事實を容れ又は排斥する所にあつた様に、情意の特質も、内的經驗に照らして考へて見ると、その對象を或意味に於て容れ又は拒否する所に存する。或事は、それが眞なりとして認容され、又は偽なりとして拒否せらるゝ限りに於てのみ、吾々の判断の内容になることが出来ると同じく、或事は善いと心に適ひ、惡いと心に悖る限りに於て、吾々の情意意識の内容となる事が出来るのである。判断に於ては、對象の眞偽が問題となる様に、情意に於ては、對象の價值非價值が問題となるのである。

併し、こゝで、注意しなければならないのは、

次の様な誤解である。即ち、かゝる情意の意識を單に、之に依つて、或對象の善とか惡とか、價值とか非價值とかを、知覺又は認知するに止る一種の認識作用であるかの如く思惟することである。この誤解は嚴に避けられなければならない。

若し、情意の作用が、單に、對象の善惡、價值非價值を認識するだけに止るならば、それは一般の判断と何等の相異がない、之と區別せられた他種の意識現象であると云はれない。情意の働きを判断及び表象と異つた、別個の意識現象であるとなすには、勿論、その基礎に、善惡、價值非價值の表象が先づ一般に豫想されなければならないといふことは云ふまでもないが、併し、さりとて、情意作用の無い前に、その對象の善惡、價值非價值のあらう筈もないので、かゝる善惡、價值非價值の表象も、吾々の情意意識の内的知覺に依つてのみ起り得ることである。善惡の表象から、情意

が生れるのではなく、情意の意識から善惡の表象も生ずるのである。即ち、情意意識の内的知覺が基となつて、善惡、價値非價値の表象、及び認識即ち判断が成立するのである。後者を以て、前者に代へることは、勿論出來ない。何となれば、後者は、前者よりも、第二義的のものであるからである。

之と同様のことは既に判断の場合に於ても云はれることである。判断に於ける眞とか偽とかの表象は、云ふまでもなく、その判断に關係して、若くはその判断を豫想して、始めて吾々に與へられる。肯定判断とは、或事を眞なりと認めることであり、否定判断とは、或事を偽なりと斥ける働きである。云つたところで、吾々の意味する處は、決して、前者は、眞なりと認められたものに眞といふ賓辭を結びつけることでもなし、後者は、偽なりと認められたものに偽といふ賓辭を結びつけ

ることでもあり得ない。然らずして、吾々の既に論じた處は、却つて、かゝる賓辭又は表明の單に或意識が對象を志向的に取容れるその取容れ方の特異なること、即ち或意識が内容に對するその作用關係の仕方が獨特なものであるといふことを、之で言ひ表はしたに過ぎない。そして之は、今更改めて注意するまでもあるまいが、即ちかういふことが明かにされたといふことを繰返す必要がある。或事を眞なりと認める者は、常にその對象を受入れ認容して之を嘉納するのみならず、更にその際、この對象が果して認容され受入れらるべきものなりや否やの疑問に對しても、その受容れらるべきものである、即ちその對象が眞であるといふことの謂は、一種の確信をも含んで、認容してゐるものでなければならぬ。或事を眞なりと認めるとは、かゝることである。偽なりと認めるといふことにも、同様のことが云はれな

ければならない。一言にして蔽へば、判断に於て或對象を受容れるとは、同時に、その對象が眞であるといふことをも受容れるのでなければならぬ。即ちかく認めることが正當にして誤りでないとの洞察を内に含むで下す判断が眞の判断である。

吾々が情意の意識に於て、或事が善いと心に適ひ、悪いと心にそむくといふ様なことをいふのも、ほゞ右と同様な意味に於いて云つてゐるのである。即ち情意意識に於て、善が、善いと心に適つたものに、悪が、悪いと心にそむいたものに、謂はゞ結びつけられる書き込まれるといふ様な意味でなく、却つてかゝる情意が、獨特な意識の作用として、その内容に對し、特殊な關係の仕方をするものであるといふことを示すに過ぎない。吾々の情意意識即ち心情の働きに於いて、情意作用獨特の對象關係は、唯その對象が如何なる仕方

意識されてゐるかに依つて知らるゝのであつて、意識された對象、即ち志向的内容が如何なるものであるか、即ち善か悪か、價値か非價値かは、この作用に依つてそれに加へられ、謂はゞ書込まれて明かにされるのである。従つて、かゝる對象の「判断」は、この意識その物に取つては、全く二次的の派生的の事柄に過ぎない。吾々は情意の意識に於て、決して、之は好ましい、之はいやだと、對象を判断するのでなく、唯之を、ひたむきに愛し、または厭ふ丈である。——勿論この際、かゝる情意(愛憎)の對象が、善或は悪、價値或は非價値として、同時に認められてゐるといふことは云ひ得るであらう。之は、判断に於ても、その判断の對象が、眞或は偽として、同時に認められてゐなければ、判断が成立たないと同様である。併し對象に於けるかゝる類似があるにも拘らず、その對象に對する意識の關係は、判断と情意(愛憎)と

で、著しき相異があることを認めなければならぬ。情意の作用に於ては、対象の善惡、價值非價值を判断即ち認識するのではなく、之に對し吾々の心が感じ、或は好惡するのである。即ち対象を愛し又は厭ひ、欲し又は嫌惡するのである。情意は即ち興味である。対象に向つて所謂心情が動くのである。單に、かくあり、かくあらすと判断する丈に止らぬ、かくありかくあらぬことに對して、興味を働かすのである。かくあることを好み、かくあらぬことを望むのである、若くはかくあることを厭ひ、かくあらぬことを願ふのである。言葉を換へて云へば、即ちかくありかくあらぬことの眞偽が第一義的の問題ではなくして、そのかくありかくあらぬことを好惡し、若くはその善惡が當面の關心事である。そこに兩者の間に、対象間の相異は兎も角、その対象に對する意識の態度、即ち作用の志向關係に於て、大なる相異があることを

認めねばならぬ。この相異を、吾々は内的經驗に訴へて、はつきり區別することが出来る。こゝに判断と情意作用との、意識現象として、明かに異つた種類の意識關係であることを、過りなく知ることが出来るのである。

以上は、所謂感情に於ても、努力に於ても欲望に於ても、意志に於ても、即ち、凡て吾々が一般に心情の働きと云つて、知的作用と區別して名づける、所謂情意的意識作用には、何れにも、全く同様に、一般的に又共通に見られる現象である。之に對し、意志と感情とは、又、全然類を異にする精神現象であるとなして、兩者の間に明確な根本的區別を立てんとする學者もあるが、併し兩者は果して、精神現象として、吾々が、表象と判断、判断と心情の作用といふ様に分つ、その所謂対象に對する作用の志向的關係に於て、區別することの出来るものであらうか。意志と感情との

以上は、所謂感情に於ても、努力に於ても欲望に於ても、意志に於ても、即ち、凡て吾々が一般に心情の働きと云つて、知的作用と區別して名づける、所謂情意的意識作用には、何れにも、全く同様に、一般的に又共通に見られる現象である。之に對し、意志と感情とは、又、全然類を異にする精神現象であるとなして、兩者の間に明確な根本的區別を立てんとする學者もあるが、併し兩者は果して、精神現象として、吾々が、表象と判断、判断と心情の作用といふ様に分つ、その所謂対象に對する作用の志向的關係に於て、區別することの出来るものであらうか。意志と感情との

間に、その對象に對する關係の仕方に於て、はつきりしたちがつた作用としての特色の相異を見分けることが出来るであらうか。その區別が、明かなる内的知覺の知識として、吾々の意識の中に現はれて來るであらうか。むしろその區別は、程度の區別として、即ち同一意識關係の種々なる様相の變化として理解さるべきものではないであらうか。表象、判斷と並んで、獨特の意識關係の精神現象としては、却つて、同一分類の中に、一つに纏めらるべきものではないだらうか。多少諸家の考への検討にも亘つて、この事を今少し問題としてみようと思ふ。

三

ロツツエはそのミクロコスモスの中へ於て、意志を知識と區別して、後者は表象或は判斷であるが、前者は之と異つた作用、即ち或事が善いと心

に適ひ、悪いと心に逆つて、之を是認し又は否認する。所謂知るといふことなどは全く異つた意識の作用であることを云つてゐる。即ち、之を、吾々の今の言葉で云ひ換へるならば、意志の本質は、或對象を、善或は惡と認めて之に關係する、吾々の意識の獨特の關係の仕方であつて、表象や判斷に於けると異り、又別種の作用の働きに依る對象への志向的關係を含むものと見てゐることにしたのである。

カントやメンデルスゾーンなども、同様に、意志の特質を、善惡の對象に關係するにあると見てゐた様である。更に溯つて、トーマス・アクイノスやアリストテレスなどにも、既にこの考は現はれてゐる。アリストテレスに於ては、善は望ましいものであるから、善いといふこと、望ましいといふこと、同じ意味に用ゐられてゐる。従つて或欲望の對象はいつも善であり、少くとも善と見

えるものでなければならぬ。その倫理學に於ても云つてゐる様に、凡ゆる行爲や、凡ゆる選擇は、善なるものを得んとて努力することである。従つて、善とは、それに向つて凡ゆるものが努力する當の目當であるといふことが出来る。こゝに於てアリストテレスは、善と目的とを全く同一に見てゐることになる。この考は、中世に入つて、トーマス・アクイナスに傳はつた。アクイナスは、思惟とは、對象を認識し得るものとして意識すること、欲望(意志)とは、對象を善なるものとして意識することであると云つてゐる。従つて、同一の對象も、或は知識の、或は意欲の、即ち全く異つた色々の意識作用の對象となり得るのである。

以上の如く、色々の時代に於て、色々の秀れた學者が、兎に角、努力や意志を、或對象を善と認め惡と斥けて之に關係する、吾々の意識の特有な關係の仕方、即ち作用の志向的關係にあると見て

ゐる點では、略一致してゐる様である。

次に感情は如何。普通、快不快は感情であるとする。そして意志とはちがつた吾々の精神現象であると考えへる。快は、或對象をよいとしてこゝろよく受取り、不快は、之をよからずとして不精無精に、若くは厭ひながら受取る、特殊な仕方の意識作用である。この際、こゝろよいこゝろよくなひは、勿論、善い、悪いの價値非價値の問題にならねばならぬが、それが意志對象の價値非價値と直ちに結びつくかどうかは、一應檢した上でなければ遽かに斷することは出来ぬ。

ロツツエはそのミクロコスモスの中に於て、快と不快との所謂感情に就て、快とは、よいと心に適ひ、不快とは、悪いと心にそむく或對象の價値非價値に對する吾々の心の態度であるといふ風なことを云つてゐる。この場合ロツツエが、よいと心に適ひ、悪いと心にそむいて、その對象の價値非

價值に關係する吾々の心の態度といふのは、果して如何なる種類の特異な心の態度であると考へたか、それ丈では尙充分はつきりしないのであるが、少くとも、その心の態度を、單に、その價值非價值を知る認識の態度であると見てゐないことは、感情と判斷とを、全く別の意識現象であると云つてゐる彼の言説に見ても、明かなことと思ふ。のみならず、感情を、常に、對象の價值非價值を「感じ」て、之をよしとし、若くはよからずとする消極的態度の意識とのみせず、自ら丁度意志に於けるが如く、之を嘉納し、若くは拒否せんとする積極的意識の作用であると見てゐる點は、特に注意すべき點であると思ふ。之で見るとロツツエも亦、暗に、意志と感情とを、對象に對する志向的關係に於て、互に共通する所あるを認め、兩者をむしろ、同一種の意識的態度の様に見て取扱つて行くべき傾向のあつたことが、すぐ觀取される。

さきにロツツエが、意志のことを述べるに、普通感情に對して用ひられる様な言葉を度々用ひてゐるのに觀ても、吾人のこの推察は、必ずしもロツツエを誣ふるものではない様に考へられる。カントはその判斷力批判に於て、感情と欲望とを區別しようといふ所で、却つて、兩者に共通な一語「快適」といふ言葉を用ゐて、所謂感情を、利害を離れた快適不快適と名づけ、欲望を、反對に利害に關はる快適といふ様に云つてゐる。併し少し仔細に檢すると、カントのこの考は、感情を、只對象の表象にのみ興味を有し、而して、欲望をその對象の存在に關して興味を有つことであるといふ様に考へてゐる様で、明かに、兩者ともその意識關係の本質を誤り解せしめる恐れのある云ひ方であると思ふ。他の論文で、併し、カントは、かゝる誤解のあるべからざることを、もつとはつきりと云つてゐる箇所がある。即ち、眞なるものを

表象する働きは認識であるが、善なるものを感得する働きは感情である。而して、兩者は嚴に區別しなければならぬと云つてゐる。感情は、單に表象するのではなく、感得するのである、而も善なるものを。——明かにこゝに感情と意志との間の共通な志向的關係が暗示されてゐるではないか。即ち、同一なる對象善を、知るにあらず表象するにあらず判断するにあらずして、愛し若くは好むといふ仕方は、意志及び感情の何れにも云はれる吾々の對象意識の獨特の仕方であるといふことが出来る。

意志と感情との、右の様な共通志向關係の例證は、尙この他、多くの學者の言説からも擧げることが出来る。例へば、ヘルバルトの如き、マースの如き、ホッフバウエルの如き、又著しきは、強く意志と感情とを別の精神現象として主張せんとしたハミルトンの如き、皆、暗に、同一歸結に陥

る傾向がありくと見えてゐる人々である。遠くは、アリストテレース、トーマス・アクイノスまでも同様であると考へることが出来る。昔は、思惟と欲求と二つだけが區別せられて、後者の中には快不快の感情も含めて、凡て判断及表象を除いた吾々の意識全體が纏められたものである。トーマス・アクイノスの如き、明かに、心情の働きのとして意志感情兩者を一緒に論じてゐる面白い論文もある位である。

意志及び感情が、精神現象として、對象に對するその志向的關係を全く同じくするといふことは右の様な諸家の説に照らさずとも、日常生活の上の出來事に徴しても、之を推察するにさして難くない。吾々はよく、快不快の感情を表はす言葉とその儘、意志發表の言葉として用ゐることが頻々ある。例へば、普通に、こゝろよいとか、こゝろ

よくないとかいふ言葉を、その儘轉じて、欲する欲しないとか、好む好まないとかいふことに用ゐる。更に進んで、こゝろよいものは意に適ひ、意に適ふものは得んと欲し、若しくは之を愛する。

善いといふことは好まじきことであり、悪いといふことは厭はしきこととなる。善惡の價值が、その儘、愛憎好惡の對象となり、愛憎好惡が、その儘、快不快意欲不欲の働きともなる。愛すると云ひ、厭ふ或は憎むといひ、明かに吾々の意志の作用であると共に、亦吾々の感情の作用である。而して、その對象は、何れも、好まじきもの即ち善である。善を好み惡を厭ふ、之が吾々の情意である。價值とは愛すべきもの、好まじきものであり非價值とは厭はしきもの憎むべきものである。價値非價値があつて、之を愛し若しくは惡むのでなく吾々が或物を愛し、若しくは惡むといふ意識の働きがあつて始めて、かゝる對象に善惡價値非價値

の屬性を歸することが出来るのである。而して、この事は、所謂感情と意志との兩者に共通に起ることであつて、そこに何等の志向的關係の相異を認めない。

尙、論者の中には、所謂意志自由の問題や、それが行爲に關して、感情は行爲に關係しないといふ様なことから、意志と感情とを別な精神現象とせねばならぬと考へるものがあるかも知れないが之は、必ずしも、兩者の志向的關係を異にするといふ理由にはならないのである。所謂感情にも、或程度までの、自由と訓練とを容れ餘地があるし、又、行爲との關係に就ては、既にアリストテレスも注意してゐる様に、吾々はむしろ、意志よりも感情に動かされて行爲することが多いのである。こゝには兩者の相異よりも、却つて、その相似が多く語られてゐるといふべきである。

以上の迂餘を大體次の三點に要約して、ブレンタノの、精神現象分類に於ける感情意志同作用論の主眼とすることが出来る。

第一、ブレンタノの根本の考へは、精神現象を分つに、その作用の、對象に對する志向的關係の異同を目標とすべしといふにあるから、この見地から見て、意志と感情とに何等の差異を認めないといふのがその主眼である。即ち、兩者共に、或對象を愛し又は厭ふ、吾々の意識の、所謂興味作用若くは價值作用といふ、同じ志向的關係に於て立つものであるから別の作用となすゆわれないといふにある。

第二、意識現象を區別するに、その對象に對する關係の區別が、はつきりと吾々の内的知覺の上に現はれて來ねばならぬといふのが、ブレンタノの考であるが、意志と感情とに於て、そのはつきりした區別を、内的知覺の上で、つけ難い、む

しろ、その類似が多く吾々の知覺に現はれるといふ點。このことは、吾々の表象及判斷に較べて見ると、殊に甚しい。即ち、表象と判斷、判斷と情意、情意と表象といふ、三つの間に於けるが如き區別が、如何にしても、吾々の意志と感情との間の區別として、内的知覺の上に現はれて來ぬといふにある。

第三、よし、感情と意志とを、所謂別の意識として、便宜上、分けて考へ得るにしても、それは同一作用の色合ひの區別として、むしろ、分類の上からは、表象や判斷に對立すべきものでなく、その第三の精神現象としてのその内部での區別と見るべきであるといふこと。

以上三つの最後の點、即ち第三の點に關しては尙かういふことが附け加へられて置かねばならない。即ちブレンタノの考として、意志と感情とは、一つの作用、即ち同一の志向的關係に於て立

つ精神現象と見るのであるが、その現象の中にも更にその下に、細かな幾つかの區別を設けようとする企ては、何等の妨げもないことである。それは一作用の様相として許さるべきことで、同様の區別は、現に、表象にも、また判斷にも、起り得る。判斷の否定、肯定は、その性質の上の區別であるが、その外に判斷は、定言、假言、選言などいふ所謂モダリテートの區別をも考へることが出来る。これは、そして、學問研究の上に、少からず重要な、また無意味ならぬ細別であつて、論理學研究の上にも、充分顧慮さるべき必要の區別となるのである。否之に似た細別をブレンタノーは表象にすら施してゐる。所謂表象の様相の區別或は表象の時相の區別がそれである。情意に於ける感情意志の區別の如き、かゝる様相の上の區別と見られないこともないだらうと思はれる。併し、普通の心理學に於て、所謂感情の二方向説、三方

向説、數方向説など唱へられる様に、情意を、唯意志と感情との二極にだけ分つべきものか、若しくは、願望、意志、希望、欲求、決斷、確定、決心、勇氣、興奮、緊張、喜悅、愉快、快適、満足など、種々の様相或は強さ、程度等に區別さるべきものであるか、是は今遽かに臆斷を許さざる、困難なる問題となるのであるから、輕卒にこゝで深入りすることを、吾々はむしろ差し控へなければならぬ。

四

最後に、以上この論全體の、最初からの疑問として、吾々の頭に閃いてゐた。右の如き精神現象の表象、判斷、愛憎(情意)といふ三分法が、然らば、所謂眞、善、美の區別と、結局如何に關係するかこの點に關するブレンタノーの考を聞いてこの篇全體を終り度いと思ふ。

ブレンタノーに依れば、眞善美の區別も、結局吾々の意識の對象に對する志向的關係の區別に歸することが出来る。精神現象は、各その作用の志向的關係に於て、その状態の理想的完全境を有つことが出来る。而して、その意識を吾々は、各内的知覺の上に於て異つた志向關係の意識として意識する。これが所謂眞善美と稱せられるものである。或對象を、正しく且つ十全に判斷した時の判斷に、吾々は、眞を意識したといふ内的知覺を伴ひ、或對象を、正しく且つ十全に愛し若しくは厭ふて、即ち愛憎の理想的完全状態に於て行動したと考へられる時、吾々は、その心情の働きに、善といふ内的知覺の上の意識を伴ひ、表象に於て或對象を理想的完全に意識して表象すれば、その表象はおのづから内的知覺の上に於て、吾々には美として意識せられる。眞も善も美も、かくして吾々の精神現象の三つの作用の、各、その完全な

る理想的境地として内的知覺の上に現はれる意識に附した名稱に過ぎない。或對象が眞でも、善でも、美でもなく、或對象の意識が眞であり、善であり、美であるのである。即ち、その對象を意識する吾々の精神の理想的完全なる志向的關係が、内的知覺の上に、即ち謂はゞ内面的感情の上に、現はれて、眞となり善となり美となるのである。而して、かゝる作用の理想的完全境は、何れの意識にも、多少の程度に於て、内的知覺の上に、いつも現はれてゐなければならぬのであるから、吾々の精神現象は、如何なる場合に於ても、常に必ず、眞及び善及び美を含んだものである。就中美は、吾々の精神現象がいつも表象を核心として働いてゐる以上、その直接の状態に於ける内的知覺の純なる反省としては、美として意識されなければならぬ。少くともされ得るものでなければならぬ。又、眞も、吾々の精神現象の内部に、

常に伴ふ、一つの根本的意識の特色でなければならぬ。何となれば、内的知覺は、所謂作用の意識として、吾々の具體的精神現象には常に伴ふものであり、而も、之に基く直接自明の内的判斷、即ちブレンタノーの所謂内的知識は、常に決して誤ることなき即ち絶對第一義的に眞なる判斷として凡ゆる精神現象に常に含まれてゐるものであるからである。之は、凡ての眞偽は、結局、この内的知覺の上の明白さを伴ふか否かに依つて決定するより外に道のない、最も根本的なる精神現象の特色である。最後に、善は、以上の眞及び美が、共に吾々に取つて好ましきもの愛さるべきものとして即ち所謂よきものとして、吾々の意識の中に常に、その情動的動機の根本的志向關係として現實に含まれてゐる以上、また吾々の精神現象の根本に潜む所謂價値の意識として、抜き去ることの出来ないものとなつて現はれてゐるものと見ること

が出来なければならぬ。かゝる理想境に於て、所謂反省の上に、吾々は眞善美の合一點をも見出すことが出来るのであるまいか。

尙、作用を眞となし、善となし、美となすといふことに就ては、多少の異論が起り得ることでもあらう。併しながら、カントも既に云つてゐる様に、物が善でなくして、物に向ふ吾々の意志が善であるのである。眞に關しても、吾々は亦、或對象が眞であるのでなく、その眞に關する吾々の知識が眞でなければならぬ。即ち、その對象に就てそれがあるとか無いとか、かうだとかあゝだとかいふ吾々の判斷、即ちそれに對する吾々の作用の或志向的關係が眞でなければならぬ。

次に表象が美であるといふことに關してブレンタノーは、最も手近く、カントの言説を引合ひに出してゐる。カントに依れば、美とは、或對象の單なる表象に結びついた快感である。その對象を

欲求するでもなく、又かゝる表象に對應して、その對象が存在しなければならぬ必要もない。それは、唯單にその對象の表象にのみ結びついて現はれる吾々の内的知覺の上の意識である。その或完全なる意識状態に名づけて、吾々は之を美と呼ぶに過ぎない。

一體眞善美を、對象の性質と考へるのは、ブレンタノーもはつきり云つてゐる様に、その對象に對する作用の屬性を、移して、吾々が考へるからである。各の作用の反省の上に、その作用の對象の性質を考へ、移して以て、その作用の屬性をその儘對象の性質と考へるからである。眞とは、判斷の働きに伴ふ吾々の内的知覺の上の、その作用の屬性の意識に名づけらるべきものであるが、直ちにそれが、かゝる作用の對象の性質と考へられる。善とは、情意の働きに伴ふ吾々の内的知覺の上の、その作用の屬性の意識に名づけらるべきも

のであるが、直ちにそれが、かゝる作用の對象の性質と考へられる。美といふのも、實は、吾々の意識の表象作用に伴ふ、その意識の内的知覺、即ちかゝる作用の意識に際して、その屬性として附加さるべき一種の内的知覺の上の性質に外ならぬが直ちにそれが、かゝる表象作用の對象その物が美なりと考へられる様になる。

かくて、吾々の内的知覺の上の反省、即ち謂はゞ作用の屬性を各その對象に投射することに依つて、始めて吾々は、眞なるもの、善なるもの、美なるものといふ是等の作用の對象の概念を構成することが出来る。また實際普通によくかう云ふ風な概念轉用は多く許されてゐるのである。

眞善美の合一といふことに關連して、ブレンタノーは、以上の如き意識の三分法に於て然らば、精神現象の統一をどう考へたのであるか。所謂意識統一の問題が尙殘る。

表象、判斷、愛憎を精神現象の三つの、而して唯三つの、志向的關係による區別と考へたのであるが、このブレタノーの分類は、所謂普通に知情意と區別する一般心理學者の精神現象の分類と同一に論せらるべきでないことはいふまでもない。知情意は離すことが出来ぬと考へられるが、その間に統一の順序を考へるのは、學者によりて必ずしも一つではない。主知的傾向の者は知を最高の統一と考へ、情意をその支配に置かうとする主意主義の者は、之に反し、意志を最高統一と考へ、知も情も結局之に支配されると考へる。主情論者はまた之に對し、感情を意志統一の極致の様に考へ、凡ての意識の最高位に置く。

かく種々なる立場をとる學者に依つて、種々その意見を異にするのであるが、その差は所謂統一といふことの考へ様にもよるのである。併し一面精神現象を區別するに、その區別の仕方の原理に

曖昧不徹な點があるにもよる。例へば或學者が意志と考へてゐるものを、他の學者はそれを知識にも許さんとし、若しくは之を純主觀的の感情の統一に歸せんとする。主意主義と云ひ、主知主義といひ、また主情主義といひ、要するに、その意志なり知識なり感情なりが、果して何を意味してゐるのであるか、また、その間の區別を果して何によつてつけてゐるのであるか、その分類の原理が明かでない、若しくは終始一貫した處がない。故に之を明かに決着せしめる標準が立たないのである。ブレタノーはこの點に着目して、所謂內的知覺の上に現はれる、作用の對象に對する志向的關係の相異を、目當てにしようとする。そしてその表象、判斷、愛憎の三作用の間に、一定の順序と統一關係をも考へて、それをその作用相互の單復、獨立依存の關係に依つて定めんとする。

作用の最も單純なる、且つ基礎的なるものを、

最下に置き、順次、その上加はる他の志向的關係の有無に依つて、その比較的獨立と依存關係とを區別して行く。それに従つて、作用は、次第に高等且つ非獨立的となると共にまた統一が進むものと考へられる。表象は、勿論その上に、判斷と愛憎の作用が加はらずとも、單獨に成立ち得るから、最も基礎的且つ單純なる作用である。判斷及愛憎は、その基礎に表象がなければ成立たない作用であるから、表象に較べて複雑且つ非獨立的作用である。反面に併し表象よりも精神現象として高等の意識であるといふことにもなる。

判斷と愛憎との間には、表象と是等の二作用との間に於けるが如き、基礎的若くは獨立依存の關係はつけ難い。併し、作用としての單復は考へ得るから、その點に關し、愛憎を判斷よりも高級の精神現象であると考へて、その上に順序を置くことは出来る。まつ判斷は、愛憎なくして之を下す

ことは出来るが、反對に、愛憎は、その對象の判斷は勿論含まないにしても、少くとも、その對象の存在を豫想若しくは假定してゐるのでなければ實際に成立ち得ないといふことを考へれば、存在を知る判斷に比して、かゝる存在の豫想の上に立つ愛憎は、作用として非獨立的、即ち順序の上からその上位に立つ複雑な意識作用であるといふことが出来る。尤も對象の眞善美といふ様なことは何れの作用にも自ら伴ふその内の知覺の判斷に依つて、その儘また一個の知識とも考へることが出来るから、かゝる知識に依つて、凡てが結局統一されてゐるとも考へることが出来る。併し、ブレンタノーに依れば、知識は結局存在に關する知識であつて、かゝる知識の價值、即ちかゝる存在の意味如何に關しては、より高等なる吾々の價值作用——愛憎の働きに俟たなければならぬと考へられるから、更にその上に情意の統一を考へるこ

とも出来る。結局内的知覺の上に於ては、知識と情意とが離るべからず結び付いてゐるのである。具體的意識の統一は、その儘知識であり、また、その儘情意の働きである。哲學の知識といふのも實はこゝから發するのであると考へることが出来る。(完)

彙報

教育學會例會

二月二十六日、定期の例會を兼ね、田中廣吉君の追悼講演會を開く。谷本博士は芹屋より懇々來授あり、外に田中君の生前の知己多數來會せられたり。

- 田中廣吉君追悼談 文學博士 小西重直君
- 同 文學博士 谷本富君
- 近江商人を背景させる八幡地方の女子教育 八幡高女校長 大西豊文君

美學會

二月十八日午後七時學生集會所南室に於いて左の講演があつた
 葡萄牙の畫家 モーノー ゴンザルベス

支那學會

二月二十三日午後四時より學生集會所南室に於いて
 陸修靜について 名畑應順君

寄贈書籍雜誌

- 倫理學の根本問題 文學博士 西波書一郎著
- 三哲偈講話 金澤 曉鳥 敏著
- 哲學雜誌、丁酉倫理講演集、心理研究、教育研究、内外教育評論
- 學校教育、教育時論、藥王樹、三田文學、信濃教育、教育問題研究、東洋思想研究、講座、